文化演藝

「峠」

（昭和十五年十月八日夜放送）

JOBK文藝課　岩崎　修（構成）

……バスのとまる音。

女車掌「峠の茶屋前」……お降りの方、ございませんか。

學生　あゝ降ります。

女車掌　お降りの方、もうございませんか、ございませんか、では、お待ちどうさま、お乘りの方どうぞ。

乘り降りあつて。

息子　ぢやあ、父さん、しつかりやつて來ます、お母さん。

母親　向ふは寒いから、からだに氣をつけてな、着いたらすぐ手紙を寄越すんだよ、いゝかい。

息子　うん、すぐ出すよ。

母親　お前はね、兄さんと違つて筆不精だからな……不精しないでな、何を置いても手紙はな……な。

父親　もういゝよ、婆さん、……外のお客さんに迷惑だよ。

母親　ぢやあね、からだに氣をつけて……。

バスのエンヂン。

息子　行つて來ます。

バスの音すぐ遠くなつて。

母親　あんなに手を振つてさ、……落ちるぢやないか、……オーイ……マア……からだを乘り出して……オーイ。

父親　もう、きこえやせんよ、……角をまがつたよ、……

さ、婆さん（うながして……述懷するやうに）男の子はトランク一つで行きよるから、世話ないわ。

母親　あつけないねえ、あ、バス降りたお客さん（店の中へ走つて）お客さん待たしてすまなんだねえ。

學生　いや一寸お茶を飲まして下さい、それから、なんかつまむものありましたら。

母親　ハイハイ、今すぐ湯をわかしますで。

學生（父親に）息子さん、何處か遠方へ行かれたんですか。

父親　ハア、今、滿洲へ立ちました。

學生　滿洲へ……どうして……また……。

父親　もう、こんな峠の茶屋にくすぶつてゐたつて仕方がないと言いましてな、あのほれ、滿洲開拓……。

學生　青年義勇隊、そうですか、元氣いいですねえ、でも、ここは東海道でも名ある……。

父親　えゝ、そりや新道が出來る前までは、なんと云つても賑やかでしたけれど、トンネルが出來、そこをトラックが通るやうになつちや、「峠の茶屋」も、もう駄目です、長男は東京へ働きに出てゐますし、次男は滿洲へ、こんな時勢に、若い者はぢつとしちやあ居られませんでな、勝手にさせてます。わしらみたいな年ではもう、ここも動けません。いつそ、さつぱりしてますで、もう、たまに來るお客さんに昔話でもきかせてお役に立ちますわ。

學生　新道が出來る前はお宅は舊道の上にあつたんでせう。

父親　えゝ、その頃は雲助がまだ澤山居りましてな。

學生　僕、實はその舊道の事を少し、しらべに來たんですが、……舊道はお宅の横手を登るんですね。

（解説）

茶屋の横手を登ると舊道がある、今はもう通る人もなく、うち捨てられて、徒らに雜草がおい茂るまゝである。そうして、その中に埋もれがちな道を辿つて行くと、昔の盛んな、ありさまの代りに幾多の人々の草鞋が踏みつけたに違ひない、石だゝみや、樹齡のつき

そうな松並木、また、宿の屋敷跡なぞが、そこはかとなく、物寂びた峠道の氣配を立ちのぼらせてゐる、そうして靜かに、その變遷を語ろうとするのである。

だが、今、われ〳〵はしばらく、それに耳をかすまい、といふのも、丁度あの秋草の頭上をよぎる白雲のように、ほんのつかのま、はるかの山々を越えて遠い山村の峠へ行つてみたいのである。そのやうな峠は、きつとまだ、山の谷のやうに深い目の色をした山村の人々と共に生きながらへてゐるに違ひない、われわれは、ほんの三、四、そのやうな峠を尋ね、峠と人とのつながり、また峠と自然とのつながりを眺めてみたい、それはきつと歴史ある峠の、或はかつての姿の、最も純粹な型であるかもしれないのだから。

そうしてから、今は死んでゐる歴史の峠の後を辿つてみても、決して遲くはない。かへつて少しでも多くその理解に役立つからと思ふのである。

音樂輕るやかなもの、

音樂終るころ、バスのとまる音。

女車掌　バスはこゝまでございます。この道をまつすぐに登つて行らつしやつて、左手にお入りになれば峠道になります。

ハイカー　どうも有難う。

バスの回轉、走り去る音、音樂。

ハイカー　左、峠道を經てと……こゝだな、あ一寸お尋ねします。峠道はこゝを行つたらいゝですね。

女學生　えゝ。

ハイカー　バスですーつと一緒でしたね、貴方も峠を越すんですか。

女學生　えゝ。

ハイカー　毎日。

女學生　いゝえ、土曜日毎ですわ。

ハイカー　峠の向ふに貴方のお家があるんですか。

女學生　えゝ、母さんが少し具合が悪いんですの、會ひたがりますから、土曜日には家へ歸りますの。

ハイカー　すると、月曜日の朝は、また、この峠を越すんですね。街の女學校ですね。

女學生　えゝ、私の村には學校はありませんもの。

ハイカー　あつ……（つまづく）

女學生　どうなさいまして。

ハイカー　いや切株にちよつと……でも……お母さんの病氣心配ですね。

女學生　もう、起きられるやうになりましたの。

間

ハイカー　峠の上から貴方の村、見えますか。

女學生　見えますわ、山にはきつと、もう初雪がありますわ。この前の週には、若しかすると、と思つて一散にこを駈け上りましたの。そしたら、やつぱり、まだでしたわ。でも、今日はきつと見えますわ。頂にすこうし。

ハイカー　冬が早いんですね。

女學生　えゝ、冬が長いんです。山にかこまれて、居りますから。ですから、びつくりなさる方が居りますの。峠の表口のこちらに、もう、雪が消えやうとしてゐるのに、裏口の私の村はまだ深い、深アい雪なんですもの、でも、そんな時、私の村から峠の方を望むと、峠の空がぽーつと明るく見えますわ、新學期の初まる頃ですわ。

梢のゆれる音、小鳥の囀りなど。

ハイカー　道が流れに沿つてゐるんですね、この紅葉してゐるのは、うるしですか。

女學生　ぬるでですわ、この林をすぎると、峠の頂が見えますわ、まぶしい位の赤さですわ。

落葉をふむ音。

ハイカー　ずいぶん、足が早いんですね。

女學生　だつて馴れて居りますもの。

（解説）

この深い秋、村里と街とを結ぶ峠、越えて向ふの街の學校の寄宿にゐる女學生のそのお母さんは病氣なので、燃え立つやうな紅い峠道をカバンを提げて越えて行くのである、これは、たしかに美しい秋の點景である

だが、峠の麓にはバスが通つてゐる、この美しい峠をバスが行く日も程遠くはないだらう、そうなると、われ〳〵はもつと深い峠へ行かねばならぬ。だが其の前に一寸注意をしやう、はからずも、この女學生が洩らした言葉、峠の裏口と表口に就いてのことである。

よく峠には裏、表があるといふ。人の心のようにこれは、何をいふのであらう。峠の表口とは山を登る時に、出來た道であり、峠の裏口とは山を下る時に出來た道である。人が初めて山をよこぎり、道をつけようと思ふとき、なるだけ迷ふまいとするから、谷川に沿つて進む、水の音をききながらすゝむ道、これが峠の表口である。反對に、もう頂の上に來てこれから下ろうといふときには登つて來た山の鞍部から、尾根の上に出て、眺望をよくして、下の平野に目標を定めて下るから、わざ〳〵濡て歩きにくい谷川に沿ふては降らない。乾いた道を行く卽ち水音から遠い道、これが峠の裏口である。

で、もし、この女學生の言葉のやうに、その村が峠の裏口であるなら、谷川に沿つて行く二人の辿る道は、峠の表口である、そうなると、初めて、この峠を越えた人は今二人の行く側から女學生の村をめざして交通を求めて行つたので女學生の村では、受動的にその交通を受けとつた、といふ事になる、だから、大袈裟に言へば、最初の文化或は經濟關係は、決して、女學生の村から發したのではないといふことになる。

少し廻り道をした、急いで次の峠へ行こう。

音樂、ハミング。

朗讀の終りまで、かすかに。

朗讀　小島烏水氏の紀行の一節——

三日や五日では人里に下りられさうにないと思ふと、山中の愁ひ、それは普通の旅ではおそらく想像も出來ない哀しみが重石のやうに胸を壓して來る、寂しいから伴の人夫を捉へて、何か話をしないかとせがむ。さうすると、彼はこんな話を初める。

話の中途で、木の根や石屑をひよいと飛んで、私の方に注意しながら、「麓の女とこの峠を越えて谷底にある下湯島の男とが一緒になつた。女が間もなく病氣で死んだので、七里の大嶺を、自分も知つた人たちと、會葬に來た。

三日、春が幽谷に入つて谷の水が油を流したやうにとろりと澄んで光つてゐる。

崖の曲り角へ來ると、雪のやうに咲いてゐる山櫻がほろ〳〵と散る。その山風の冷いこと。水涕の垂れたひげづらを横になぐりつける、その時の寒かつたことは未だ忘れられない。

（解說）

この話から受ける感じは、山の峠と人との生活がぴつたり一致してゐるといふ事ではないだろうか、なんだか、ごく人間の素朴な生活の斷片をぽいと投げ出されたやうではないか。

これは何故か、このやうな谷と谷とを結ぶ峠は恐らく、あんまり、他の國の人々に知られてゐないのである。そこではこの峠をはさんで谷と谷との村に生まれ、育つた人間の生活が少しも外部からみだされず、平靜にいとなまれているのである。

こんな峠では何か一人の運命を考へさせられ、瞬間、淡い旅情を感ずるものだ、では次のこのやうな或は更に深い峠の冬——

吹雪。

猛烈な風。

夜。

父親　ひどく喧雪のオ。

息子　うん。

父親　さ、飯にすべえ。

息子　うん。

風の音。

間

助けを呼ぶ聲「お——い」

風の音。

聲　「お――い」。

風の音。

息子　お父う、聞いたか。

間

息子　お父う、聞いたか。

父親　この吹雪ぢや、助からねえかもしんねえ。

間

風の音。

間

聲　オーイ、オーイ。

風の音。

息子　峠の方だド、峠の方だド……（切迫して）オ父、カンテラ出すべ！　オ父カンテラ出すべ！。

風の音更に凄く。

（解說）

自然の暴威と競ふ逞しい生活である。

一冬必ず二、三回はこのやうに助けを求める聲がするといふ、樵夫や里人さへ迷ふのだ、だが吹雪のおさまつた峠の夜のやどりほど深い靜寂はない、爐の火の燃える音、湯のたぎる音、そしてやがて更に深いねむり。

音樂。

トンネルを行く汽車の汽笛。

長く餘韻を洩いて、つゞいて車輪の音。

（解說）

信越線が柏原のトンネルを過ぎて長野の邊に來ると、空の色が變つて來る、沈鬱な灰色の空が鋭い冴へた青さに變る。

峠一つを境にして、氣候や風物ががらりと變る、たゞしは決して珍らしいことではない。

手近に碓氷峠の例をとつても、峠を下りて關東平野にさしかゝれば、氣溫はもとより植物がまるで違ふ。落葉松、白樺、厚朴の林の代りに、黑松、欅、柏が茂

り紫外線と低溫に鍛錬された草花の亂れる荒野の代りには、稻や甘藷の單調な田園風景が展開する。

越後の人々が寒空に信濃へ連なる山々を見て、あちらは明るいと思つて、誘はれるやうに山を越へたといふ。彼等はきつと、山の彼方に日當りのいゝ村景色を描いてゐたに違ひない。古來、峠といふものは何かひどく人のあこがれをそゝるものであるらしい。

汽車の音。

中央線や信越線などが、我國の山岳地帶を縱斷、或は橫斷してしまつたが、昔は峠越えて街道を行つて、或は表日本から裏日本へと、辛苦の旅を續けたのであつた。そのやうな、古來の街道につながる峠には今はもう、人との實生活の交渉のないといつていゝ、峠がやはり多い、その代り我々の祖先の數々の業蹟や、心の美しさを知られる峠が澤山にあるのだ、八十里越や、六十里越といふのは、長い峠越をする古い人々の、しらずに洩した嘆きをそのまゝ名にしたものであらう、旅の辛苦のあとが偲ばれる。また、飯田から下りる神坂峠は、日本尊命がお通りになつたといはれ、傳敎大師や兼好法師のさすらひのあとや、特に芭蕉の

「送られつ送りつ果ては木曾の秋」

の句が胸をつくやうな峠である。

また飛んで、東北の街道筋にも、同じやうに歷史にあふれた峠が多い。あの宮城、山形の國境での金山峠にある御堂には武運長久を祈つた武家の落書をひろつたりするのは時節柄、今昔の感が深いのである。

さてどうやら、ようやく吾々は最初の出發點に戻つたやうである、今こそ古い歷史の峠をゆつくり辿る時なのである、だが餘裕がないから、すぐ東海道は五十三次の箱根八里の「難所」へ行かう。なんとなればその峠越の歷史こそはあらゆる古い峠の歷史の持つ變遷の典型だからである。さうして東海道を通つてあの鈴鹿峠、物寂ひた舊道へ歸るとしやう。

朗讀　更級日記

まだ曉より足柄を越ゆ、まいて山の中の恐ろしげなること、いはんかたなし、雲は足の下に踏まる。山のなかばかりの木の下のわづかなるに葵のただ三筋ばかりあるを「世はなれて、かゝる山中にしも生ひけむよ」と人々哀れがる。

（解説）

この日記の著者は上總から京都まで九十日餘を費やし「世離れた足柄越」には四、五日も苦しんだといふ。こゝにいふ足柄越とは箱根外輪山の麓から竹の下に出てそれより足柄を越え、今の小田原へ出た道である。これは古から、卽ち平安朝をさかのぼる、上古からの東下りの道であつた。

次は十六夜日記を見ると、

朗讀　十六夜日記

二十八日、伊豆の國府を出でて、箱根路にかゝる、いまだ夜深かりければ、

「たまくしげ、箱根の山をいそげども、なほ明けがたき、よこ雲のそら」

足柄は道とほしとて箱根路にかゝるなりけり。

（解説）

此處で注意することは十六夜日記の阿佛尼が「足柄山は道遠し」といつて「箱根路」を越えてゐることである。箱根路と足柄路とは別である。卽ち桓武天皇の御代に富士が爆發して、「足柄路」をふさいだので、代りに出來たのが箱根路である。だが足柄路はすぐ翌年修復されたから、ここに足柄路と箱根路と二つが、所謂、箱根山を越す道となつたわけである。それで十六夜日記の作者が足柄路より、はるかに危險な箱根路をえらんだのは偏へに子の心を思ふ親心のせつなさで哀れが深い。

さて平安朝の人には、しかし大體、踏みならされた足柄路を選んだ、新羅三郎義光も、伊勢物語の業平もさうであつた。鎌倉時代でも、愼重を要する軍隊の輸送は、みな足柄越であつた。だが個人には道をいそいで、

箱根路を越へた人もゐたのである。それが元和四年、命によつて箱根に大道が出來たため再來足柄越へはすつかりさびれた。今まで何故、このやうな變遷をながく〳〵語つたかといへば、要するに峠のもつ新道、舊道を如實に、これが語つて居るからであり、且峠自身の變化は天變地變によるほかは、あくまでも人間の意志によるといふことを語つてゐるからである、だから「嶺は自然のたくみであるが峠はあくまでも人間の作つたもの」といふことがいはれる。

さて箱根大道が開通した元和以後江戸時代に入ればあの東海道五十三次の言語に絶する賑ひが始まる。

（一）へてんてん手毬　てん手毬
　てんてん手毬の手がそれて
　どこからどこまで飛んでつた、
　垣根を越へて屋根こえて、
　表の通りへとんでつた〳〵、

（二）へおもての行列、なんぢやいな、
　紀州の殿様、お國入り
　金紋先箱、供ぞろい。
　お籠のそばには髭奴、
　毛槍をふり〳〵
　ヤツコラサノヤツコラサ

（三）へてんてん手毬はてんころり、
　はづんでお籠の屋根の上、
　もし〳〵紀州のお殿様
　あなたのお國のみかん山
　私にみさせてくださいな〳〵、

（くちぶえ）
「しぐれ蛤みやげにさんせ」
「しぐれ蛤みやげにさんせ」
「コレ旦那衆、戻り馬にのらんか」

「戻り馬のらんか、これ旦那衆」
「お入りなさいませ、白酒もお飯もございます、お入りなさいませ」
「これから二里半の長丁場、籠はどうだ〳〵」
「おたばこはいりませぬか、揚子にはみがき鼻紙はよろしうございますか。お煙草はいかゞ揚子にはみがき」

（四）〽お籠は行きます東海道、
東海道は松並木
とまりとまりで日がくれて、
一年たつても、もどりやせぬ、
三年たつてももどりやせぬ、
〽のぼり下りで日がくれて、
三年たつても、戻りやせぬ、
三年たつても戻りやせぬ、
……

合唱消えて、馬の鈴。
馬子唄。
〽坂はてる〳〵鈴鹿は曇る
あひの土山雨がふる。

（解説）
白日の夢だ、と言ふ様に街道の坂が白々と續き、その盡きるところ、黒い鳥が翼を擴げたやうに、深い蔭を漂はせて、鈴鹿の山が、青い秋空の下に、ひつそり浮んでゐる、さうしてあの物言ひたげな松並木と、石疊との、見捨てられたただすまい……それ等を背景にして、茶店の主人は、さつきバスを降りた學生に、先程から話をつゞけてゐるのである。
鈴鹿峠の茶店の親爺は語る。
「ずつーと昔は、この鈴鹿も箱根と競ふ難所でしたでせうが、あの賑しいを知つてゐなすつたら、どうしてどうしてそれどころではありませなんだ。新道の出來る

までは、まだ、雲助がたくさん居りましてなあ、ふんどしだけの素裸で、この峠を往來してゐたのを、まだはつきり覺えてゐます。この上の舊道の峠の頂に、宿屋が三軒もありまして、その上、茶屋が軒を並べてゐましたよ。それに人力のたまりがあつて、日に三十臺からが客を待つてゐたんですからなア。ひまな時には、奴等雲助とくるまざになりをつて茶店の奥で花をひいてゐる。そこへ新らしい荷物が下から屆くと、やつとばかり、それをひっかついで、峠を一散に走つて行く。それはもう威勢のいいことでした。

今でこそ街道のほこりをあびた家々がならんで居りますが、ふもとの土山の御維新前といへば、諸大名の宏壯な本陣や脇本陣があつて、大名が宿をとるときには、紋所のある幕を張つて威勢を示したといひますし、峠のまた坂下は、今の言葉でいへば、庶民の歡樂地で夜ともなれば、あかりがぱつとついたといひますから。

えゝなんていつても關西線が通ふてからは麓も峠もすたれ始めました、それが大正十年に、御覽の通り立派な自動車道が出來てからすつかり駄目になりました、私達も舊道からこちらへ下りて來たんですが、もう徒歩でこの峠を越す方など、めつたにありません、

殘つた息子も滿洲へ行つてしまつたし、もうぢきこの峠には、誰も昔の話などをするものは、ゐなくなつてしまひますわ、えゝ舊道はこの茶店の横手を登るんです、なにしろ、トンネルが出來、トラックが……」

トラック坂を登る音、

けたたましく。

トラックがすさましい勢ひで新道を越えて行く。それはもう峠ではない。新しい時代はこの坦々たる道に通じてゐる。そうして海を越えてヨーロッパではあのブレンネル峠の側で、世界の山脈をよぎるであらう會談が行はれてゐるのだ。（終）

（追記、本稿作成に當つては、深田久彌氏編「峠」御執筆諸家に負ふ所多きことを附記申上げます）